

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和7年5月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万3311トン、前年同月比101.6%、価格は1キログラム当たり276円、同88.3%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万7433トン、前年同月比108.0%、価格は1キログラム当たり240円、同82.5%となった。
- 夏野菜の生育は順調で、平年並みの進捗状況であり、直近2～3年のような高温による前進はない。

(1) 気象概況

上旬は、全国的に天気は数日の周期で変わった。旬平均気温は、北日本は暖かい空気が流れ込みやすかった一方、東・西日本では寒気の影響を受けやすかったため、北日本で高く、東・西日本で低かった。低気圧が通過した影響で、東・西日本を中心にまとまった雨となり、大雨となった所があったため、旬降水量は東・西日本太平洋側と西日本日本海側でかなり多く、北日本太平洋側と東日本日本海側で多かった。また、沖縄・奄美では、活発な前線の影響でかなり多かった。旬間日照時間は、高気圧に覆われやすかった西日本で多かったが、沖縄・奄美では少なかった。

中旬は、北・東・西日本では暖かい空気が流れ込みやすく、東日本では旬平均気温平年差が+2.2℃となり、1946年の統計開始以降、5月中旬として1位の高温となった。沖縄・奄美も旬平均気温は高かった。旬降水量は、低気圧や前線

の影響を受けにくかった北・東・西日本日本海側と北日本太平洋側では少なかった。旬間日照時間は、停滞した前線の影響を受けやすかった西日本太平洋側で少なく、沖縄・奄美では多かった。九州南部は16日頃、奄美地方は19日頃に梅雨入りしたとみられる(速報値)。

下旬は、旬の初め頃は暖かい空気が流れ込みやすく、全国的に気温が上がり、21日には真夏日を観測した地点も多かったが、中頃以降は寒気の影響を受けやすかったため、旬平均気温は東日本と西日本では低かった。旬降水量は、梅雨前線や低気圧の影響でまとまった雨になった所もあり、西日本でかなり多く、北日本、東日本太平洋側で多かった。沖縄地方は22日頃に梅雨入りしたとみられる(速報値)。旬間日照時間は、東日本太平洋側で、平年比44%となり、5月下旬としては、1961年の統計開始以降、1963年と並び1位タイの寡照(日照不足)となった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は図1の通り。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本				日本海側 太平洋側					
東日本				日本海側 太平洋側					
西日本				日本海側 太平洋側				日本海側 太平洋側	

資料: 気象庁「5月の天候」

1 平年を上回る水準				2 平年並み				3 平年を下回る水準			
------------	--	--	--	--------	--	--	--	------------	--	--	--

(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、
入荷量は11万3311トン、前年同月比101.6%、

価格は1キログラム当たり276円、同88.3%と
なった（表1）。

表1 東京都中央卸売市場の動向（5月速報）

品 目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	113,311	101.6	93.6	276	88.3	103.3	285	276	268
だいこん	7,146	98.0	91.8	107	77.0	100.6	108	105	107
にんじん	6,812	99.8	90.9	179	81.5	112.3	201	174	162
はくさい	6,471	103.2	101.5	53	51.6	63.7	60	51	46
キャベツ類	15,634	106.5	92.5	79	46.3	73.7	94	78	64
ほうれんそう	1,433	100.6	96.7	438	87.0	99.0	428	451	437
ねぎ	3,563	97.7	95.3	407	97.9	95.2	432	423	373
レタス類	7,218	97.5	106.2	126	73.0	76.7	133	131	115
きゅうり	6,836	92.3	87.9	278	90.5	106.3	279	271	283
なす	2,849	103.4	88.5	359	83.1	90.0	342	367	368
トマト	7,430	109.0	90.3	354	91.1	113.2	375	359	334
ピーマン	2,714	101.2	98.2	470	77.8	96.3	536	459	421
さといも	116	89.2	62.3	458	92.2	112.9	393	466	553
ばれいしょ	8,118	112.9	94.7	248	105.1	116.5	298	247	211
たまねぎ	8,660	84.0	77.7	159	129.2	132.9	167	159	153

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」
注1：平年比は過去5カ年平均との比較。
注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格は下旬に向けて徐々に
落ち着き、大幅な高値で推移した前年を2割
近く下回り、平年を1割以上上回った（図2）。
葉茎菜類は、はくさいの価格は下旬に向け
徐々に下がり、大幅に高値で推移した前年を5
割近く下回り、平年を4割近く下回った（図3）。
果菜類は、トマトの価格は徐々に増量となっ
た下旬に向かって下がり、高値で推移した前年

を1割近く下回り、平年を1割以上上回った（図
4）。
土物類は、たまねぎの価格は増量した連休以
降、少し落ち着いたものの、高値で推移した前
年を3割近く上回り、平年を3割以上上回った
（図5）。
なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

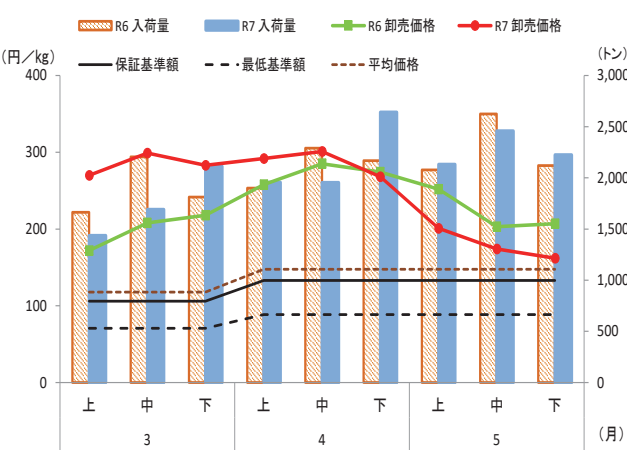


図3 はくさいの入荷量と卸売価格の推移

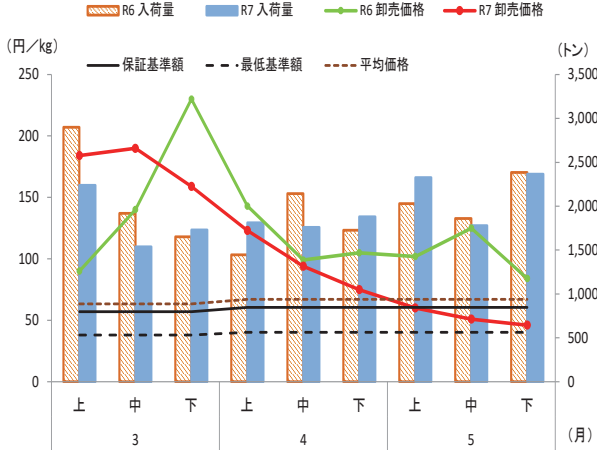


図4 トマトの入荷量と卸売価格の推移

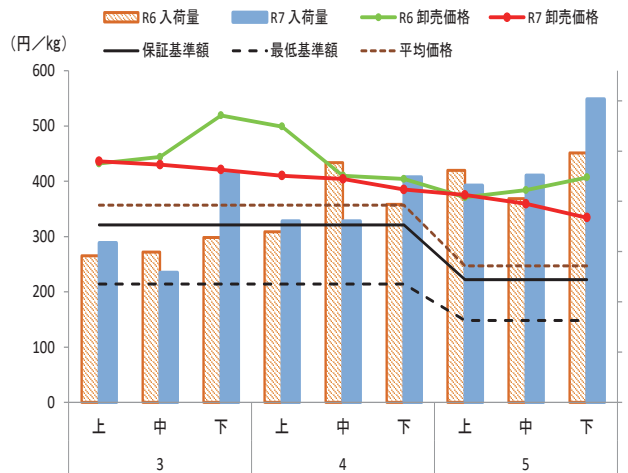
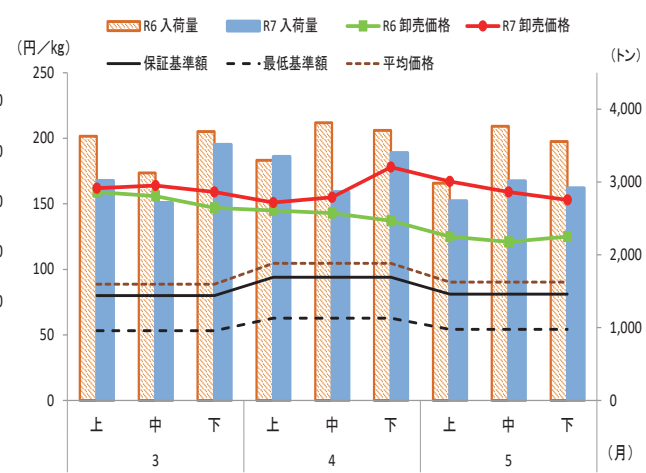


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、事業における過去6年間の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	5月の入荷量・価格の動向
根菜類	 だいこん	千葉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、播種期の乾燥による生育の遅れは、気温の上昇と適度な降雨で回復し、やや前進傾向となっている。病虫害の発生は少ないが、抽苔が発生し始めている。総入荷量は少なかった前年をわずかに下回り、平年を1割近く下回った。 価格は安定した相場展開となり、大幅な高値で推移した前年を2割以上下回り、平年をわずかに上回った。
	 にんじん	徳島産を中心に、千葉産の入荷となった。徳島産の作付面積は前年並みで、低温の影響により遅延していた生育は3月以降の気温の上昇と適度な降雨により回復し、順調である。病害虫の発生は少ない。千葉産の作付面積は、前年をやや下回り、トンネル物は播種期の乾燥の影響により播種が遅れ、発芽不良が一部散見されたものの、おおむね順調である。輸入の中国産は前年を4割近く下回っている。総入荷量は少なかった前年並みとなり、平年を1割近く下回った。 価格は下旬に向けて徐々に落ち着き、大幅な高値で推移した前年を2割近く下回り、平年を1割以上上回った。
葉茎菜類	 はくさい	茨城産の春作中心の入荷となった。作付面積は前年をやや上回り、3月以降の気温の上昇と適度な降雨に恵まれ生育は順調である。後続の長野産については、3月下旬の低温、4月の高温・干ばつの影響により生育がばらついたものの、おおむね順調である。総入荷量は前年をやや上回り、平年をわずかに上回った。 価格は下旬に向け徐々に下がり、大幅な高値で推移した前年を5割近く下回り、平年を4割近く下回った。
	 キャベツ類	千葉産を中心に、神奈川産、愛知産の入荷となった。千葉産の作付面積は前年並みで、定植が遅れ遅延傾向にあった生育は天候に恵まれ回復し、おおむね順調である。病害は少ないが、虫害の発生が増加している。神奈川産の作付面積は前年並みで、干ばつの影響によりばらついていた生育は、気温の上昇と適度な降雨で回復し順調である。病害の発生は少ないが、虫害が散見される。愛知産の作付面積は前年並みで、3月以降の天候に恵まれ生育は順調である。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度上回り、平年をかなりの程度下回った。絶対量不足は解消され、輸入は減少している。 価格は下旬に向けて徐々に下がり、暴騰した前年を5割以上下回り、平年を3割近く下回った。
	 ほうれんそう	群馬産、茨城産中心の入荷となった。群馬産の作付面積は前年並みで、高冷地は3月の低温・多雨の影響により一部で生育停滞が散見されたが、その後の天候の回復によりおおむね順調である。茨城産の作付面積は前年並みで、やや遅延していた生育は適度な日照と降雨に伴い回復している。終盤に入り品質低下が散見される。後続の栃木産など高冷地物は、播種時期は前年並みであったが、降雪や気温の低下などによりやや遅延傾向である。総入荷量はやや少なかった前年と、平年ともにやや下回った。 価格は相場下落のまま連休に突入し、棚持ち懸念などもあり動きがなく、高値で推移した前年を1割以上下回り、平年をわずかに下回った。

果菜類	ねぎ	 茨城産を中心に千葉産など、春ねぎ終盤～初夏ねぎの入荷となった。茨城産の作付面積は前年をやや上回り、生育は順調で肥大もよく、2Lサイズの比率が非常に高い状況が続いた。千葉産の作付面積は前年並みで、気温上昇と適度な降雨により生育は順調であるが、虫害が散見される。総入荷量は前年をわずかに下回り、平年をやや下回った。 価格は太物が多かったことから下旬に向け厳しい展開となり、前年をわずかに下回り、平年をやや下回った。
	レタス類	 群馬産、長野産、茨城産が中心の入荷となった。群馬産の作付面積は前年並みで、生育初期は低温の影響を受けたものの、気温の上昇と適度な降雨により回復し、おおむね順調である。長野産の作付面積は前年並みで、高温・干ばつの影響により生育にばらつきが見られた。また、一部で菌核などの病害が散見される。茨城産の作付面積は前年並みで、低温・乾燥による生育停滞から3月の気温の上昇と適度な降雨で回復しおおむね順調である。総入荷量はやや多かった前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度上回った。 価格は長野産の増量により、下旬から下がり、高値で推移した前年を3割近く下回り、平年を2割以上下回った。
	きゅうり	 埼玉産、群馬産中心の入荷となった。埼玉産の作付面積は前年並みで、加温物は順調だが、無加温物は低温の影響により、生育に若干の遅れが見られる。病虫害については、うどん粉病の発生が例年より多く、他の病害も散見される。また、アブラムシの発生が多い。群馬産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、べと病、うどん粉病などの病害や、アブラムシの虫害が散見される。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度下回り、平年を1割以上下回った。 価格は月間を通して大きな動きはなく、高値で推移した前年を1割近く下回り、平年をかなりの程度上回った。
	なす	 高知産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、4月中旬以降の出荷増により、やや成り疲れによる樹勢の低下によって、葉の黄化が見られる。コナジラミやヨトウ類、黒枯病、すすかび病、うどん粉病などの病虫害が散見されている。後続の関東・群馬産については生育はおおむね順調であるが、一部地域でアブラムシが散見されている。総入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年を1割以上下回った。 価格は、関東産が増量に向かった中旬以降底上げとなったものの、高値で推移した前年を2割近く下回り、平年を1割下回った。
	トマト	 熊本産、栃木産を中心に愛知産などの入荷となった。熊本産の作付面積は前年並みで、日照不足の影響により小玉傾向であったが、その後の天候に恵まれ回復し順調である。栃木産の作付面積は前年並みである。促成長期作は着果負担により樹勢がやや弱く、肥大不足傾向であったが、冬春作の生育はおおむね順調で、肥大も良好となっている。コナジラミの発生が散見されている。愛知産の作付面積は前年並みで、うどん粉病、コナジラミの発生が散見されるがおおむね順調である。総入荷量は少なかった前年を1割近く上回り、平年を1割弱下回った。 価格は徐々に増量となった下旬に向かって下がり、高値で推移した前年を1割近く下回り、平年を1割以上上回った。
	ピーマン	 茨城産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、天候に恵まれおおむね順調である。散見された虫害も落ち着いている。総入荷量は前年をわずかに上回り、平年をわずかに下回った。 価格は下旬に向け徐々に落ち着き、高値で推移した前年を2割以上下回り、平年をやや下回った。
土物類	さといも	 千葉産を中心に、埼玉産の入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、新物も数量がないため、残量の販売となっている。埼玉産の作付面積は前年並みで、生育は良好で収穫は終了しているが残量は前年より少ない。輸入の中国産は、前年を1割以上下回った。総入荷量は大幅に少なかった前年を1割強下回り、平年を4割近く下回った。 価格は絶対量不足から下旬に向け上昇し、高値で推移した前年をかなりの程度下回り、平年を1割以上上回った。
	ばれいしょ	 長崎産、鹿児島産中心の入荷となった。長崎産の作付面積は前年並みで、12月の乾燥やその後3月までの低温・干ばつや霜害の影響により、10～14日程度の生育遅延が見られたが、その後の気温の上昇と降雨により回復傾向にある。鹿児島産の作付面積は前年を上回り、低温・乾燥の影響により植え付けは前年より遅れていたが回復し、少なかった前年を大幅に上回った。総入荷量は少なかった前年を1割以上上回り、平年をやや下回った。 価格は、増量した連休以降、徐々に価格を下がったものの、高値で推移した前年をやや上回り、平年を1割以上上回った。
	たまねぎ	 佐賀産を中心に北海道産、兵庫産などの入荷となった。佐賀産の作付面積は前年並みだが、定植後の低温・乾燥の影響による活着不良などにより、生育遅延となった。肥大不足も、適度な降雨や気温の上昇により、回復傾向にある。北海道産の作付面積は、前年並みで収穫を終了した。作柄はあまり良くなく、残量は少ない。兵庫産の作付面積は前年並みで、^{ほじょう}圃場間格差は見られるものの、適度な降雨により生育はおおむね順調である。輸入の中国産は前年を2割近く下回ったが、ニュージーランド産が大幅に増加した。 総入荷量は少なかった前年を1割以上下回り、平年を2割以上下回った。 価格は増量した連休以降、少し落ち着いたものの、高値で推移した前年を3割近く上回り、平年を3割以上上回った。

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、
入荷量は3万7433トン、前年同月比108.0%、

価格は1キログラム当たり240円、同82.5%
となった(表3)。
品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(5月速報)

品目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	37,433	108.0	102.0	240	82.5	98.5	253	237	233
だいこん	2,266	119.9	99.8	90	63.7	94.1	99	89	84
にんじん	2,423	109.8	95.8	137	67.9	102.6	159	138	112
はくさい	3,305	108.7	119.1	58	45.0	57.1	59	59	56
キャベツ類	5,596	131.6	117.4	71	39.9	69.5	87	61	65
ほうれんそう	461	105.3	92.3	557	90.6	103.5	558	570	545
ねぎ	724	114.5	119.9	422	81.5	87.9	440	425	403
レタス類	1,768	109.2	110.5	125	67.2	74.2	137	131	110
きゅうり	1,489	89.6	88.2	253	86.7	100.4	258	247	255
なす	1,139	101.9	108.8	349	87.2	94.9	352	352	343
トマト	2,073	125.6	99.1	337	89.5	109.4	357	340	320
ピーマン	846	136.1	139.4	406	68.2	91.3	488	400	340
さといも	16	81.9	55.7	750	119.3	145.6	474	678	931
ばれいしょ	3,186	101.0	92.0	233	100.6	114.5	281	237	184
たまねぎ	4,131	90.6	90.4	147	118.7	125.0	158	146	140

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注1：平年比は過去5カ年平均との比較。
注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向(大阪市中央卸売市場)

類別	品目	5月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	香川産と和歌山産が主体となり、鹿児島産や長崎産などの入荷があった。下旬には後続産地の青森産、北海道産、石川産の入荷も始まった。各地とも順調な出荷で、全旬を通して主力産地からは潤沢な入荷となった。香川産は前年の2.5倍、和歌山産も前年を大きく上回った。月間全体では前年を大幅に上回り平年並みとなった。 価格は、入荷量が多かったため旬を追うごとに下落傾向となり、また、鹿児島産の一部に品質不良があり単価安となった。品不足で高値だった前年を4割近く下回り、平年をやや下回った。
	にんじん 	徳島産と長崎産が主体となり、兵庫産の入荷もあった。各地とも生育順調で、安定した出荷が続いた。前月までの品薄感と太物が少ない傾向から、業務用向けを中心に輸入の中国産の入荷もあり、月の前半は入荷も多かったが、旬を追うごとに減少した。しかし全体では旬を追うごとに入荷増量となり、月間全体では、前年を1割近く上回り、平年をやや下回った。 価格は、入荷増量に伴い旬を追うごとに下落を続けた。月間全体の価格は、品不足で高単価だった前年を3割以上下回り、平年をわずかに上回った。
葉茎菜類	はくさい 	主力の茨城産が、上旬から中旬にかけ出荷のピークとなったが、単価安のためブレーキがかかり、旬を追うごとに入荷量は減少した。中旬以降は後続の長野産が開始したが、茨城産減少の影響により全体の入荷量は伸び悩んだ。月間全体では、前年をかなりの程度上回り、平年を2割近く上回った。 気温上昇に伴い需要が減少し、価格は低迷を続け、月間では前年を5割以上下回り、平年を4割以上下回った。
	キャベツ類 	寒玉キャベツ、春キャベツともに愛知産を中心に、寒玉キャベツは福岡産や茨城産など、春キャベツは福岡産や兵庫産などの入荷があった。愛知産は春キャベツの残量が多く、中旬まで潤沢な入荷が続き、月間では前年を大幅に上回った。福岡産も寒玉キャベツ、春キャベツとも潤沢な出回りとなり、月間では前年の3倍以上となった。茨城産は終盤となり入荷量が少なく、月間では前年の3割程度であった。月間全体の入荷量は、前年を3割以上上回り、平年を2割近く上回った。 価格は、長く続いていた高値からの反動で急落し、産地残量が多かった中旬以降はさらに下落した。月間では、前年を6割程度下回り、平年を3割以上下回った。
	ほうれんそう 	岐阜産が中心となり、福岡産や近隣産地の入荷などがあった。岐阜産は生育良好で順調な出荷が続き、旬を追うごとに増加し、月間では前年を大幅に上回った。前段の産地は切り上げが早く、福岡産の月間入荷量は前年の2割程度であった。月間全体では前年をやや上回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は月の前半の不足感から、やや高値で推移した。高値だった前年を1割近く下回り、平年をやや上回った。

	ねぎ（白ねぎ） 	茨城産と鳥取産が主体となる入荷であった。両産地とも潤沢な出荷が続く、全旬を通じて入荷量が多い状況が続いた。月間の入荷量は茨城産が前年の1.5倍、鳥取産は2倍近くとなり、全体でも前年を大きく上回った。 価格は入荷増量に伴い下落して単価安で推移し、月間では前年を下回った。
	ねぎ（青ねぎ） 	青ねぎは、徳島産が中心となり高知産などの入荷があった。細ねぎは、高知産と静岡産が主体の入荷であった。各地とも生育が良く、順調な出荷が続いたが、末端の荷動きが悪く、発注が少なく入荷量は伸び悩んだ。月間全体の入荷量は、前年を若干上回った。 価格は引き合いが弱かったことから、単価安での推移となった。月間では前年を大きく下回った。
	レタス類 	玉レタスは裸物の長野産が中心となり、ラップ物の兵庫産などの残量入荷もあった。長野産は生育順調で、旬を追うごとに入荷増量となった。兵庫産や山梨産の残量も多く、全体の入荷量も旬を追うごとに増量となり、月間では前年をかなり上回った。サニーレタス、リーフレタスも長野産が中心となり、月の前半は福岡産の残量入荷もあった。玉レタスは単価安でも荷動きが鈍く、サニーレタスとリーフレタスの売れ行きはさらに悪く、引き合いも弱く発注が少なかったことから入荷は減少した。レタス類全体では前年、平年とも1割程度上回った。 コメをはじめ、食品全体の高値の影響に加え、長く続いた野菜が高いというイメージから消費が鈍く、玉レタスの価格は旬を追うごとに下落を続け、月間では前年を大きく下回った。サニーレタスとリーフレタスも玉レタスの影響を受け、売れ行きが悪く価格が低迷した。レタス類全体での月間の価格は、前年を3割以上下回り、平年を2割以上下回った。
果菜類	きゅうり 	宮崎産が中心となり、高知産や徳島産の入荷があった。後続の福島産の入荷も下旬に開始した。長く続いた野菜全体の高値の影響に加えて、コメを中心とした食品全体の価格高騰のイメージから消費が鈍く、販売環境が厳しい状況が続いたため、積極的な集荷ができず、入荷量は全旬を通じて伸び悩んだ。月間全体の入荷量は前年、平年ともに1割以上下回った。 価格は、野菜高値のイメージから引き合いが弱く低迷を続け、高値で推移した前年を1割以上下回り、平年をわずかに上回った。
	なす 	千両系は、高知産を中心に大阪産や岡山産の入荷があった。長茄子は、福岡産が主体となり熊本産の入荷もあった。各産地とも生育は順調で、産地出荷量も潤沢であったが、前さばきが悪く消費が伸びずに販売に苦戦した。月間全体の入荷量は前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度上回った。 価格は、消費が鈍いことから低迷を続け、月間では前年を1割以上下回り、平年をやや下回った。
	トマト 	愛知産と熊本産が主体となり、福岡産の入荷もあった。下旬には、後続産地の石川産の入荷が開始した。作付面積の減少と朝晩の冷え込みから産地出荷量は伸び悩んだ。月間全体では、少なかった前年を2割以上上回り、平年をわずかに下回った。 野菜全体の価格が高値疲れの反動で下落する中、同様の影響を受け、価格は旬を追うごとに下落した。月間では、高値であった前年を1割以上下回り、平年を1割近く上回った。
	ピーマン 	宮崎産を中心に高知産などの入荷もあった。産地出荷量は潤沢であったが、品質低下品が多く、販売には苦戦した。月間全体の入荷量は、前年、平年とも4割近く上回った。 前年の単価が高かったことと、品質低下品が見られたことにより、価格は低迷し旬を追うごとに下落を続けた。月間では前年を3割以上下回り、平年を1割近く下回った。
土物類	さといも 	上旬までは愛媛産の残量入荷があり、鹿児島産の離島もの入荷が始まったが、愛媛産は作柄が悪く前年の2割程度の入荷量であった。鹿児島産も作柄不良に加えて降雨の影響もあり、全旬を通じて産地出荷量が少ない状況が続く、月間の入荷量は前年の4分の1程度であった。全体としては輸入の中国産が中心となる入荷で、前年の1.5倍以上の入荷量であった。月間全体では前年を2割近く下回り、平年を4割以上下回った。 価格は不足感から高値推移となり、旬を追うごとに高騰した。月間では前年を2割近く上回り、平年を4割以上上回った。
	ばれいしょ 	丸芋は長崎産が主体となり、鹿児島産の残量入荷もあった。長崎産は上旬から中旬にかけて順調な入荷であったが、降雨の影響により中旬から下旬にかけて減少した。鹿児島産も降雨の影響があったが残量は多く、中下旬の入荷量は前年を大きく上回ったものの、月間では前年を下回った。月間全体の入荷量は前年をやや下回った。メークインは上旬は鹿児島産が主体となり、中旬以降は長崎産が主体となる入荷であった。長崎産は生育遅れから産地出荷量が伸びず、月間の入荷量は前年を大きく下回った。鹿児島産も生育遅れから切り上がりが遅く、中・下旬の入荷量は前年を大きく上回ったが、月間全体では前年を大幅に下回った。ばれいしょ全体の入荷量は前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は不足感から高値推移となり、旬を追うごとに下落傾向となったものの、月間では高値で推移した前年をわずかに上回り、平年をかなり大きく上回った。
	たまねぎ 	兵庫産を中心として長崎産、大阪産、佐賀産の入荷があった。主力の各産地とも例年より1～2週間の生育遅れで、産地出荷量は伸び悩んだ。兵庫産の月間の入荷量は前年を下回り、大阪産も前年をかなり下回った。佐賀産にいたっては、前年の2割程度の入荷量となった。長崎産は残量入荷であったが、遅れた分が5月にずれ込んだことで前年の2倍近い入荷量となった。月間全体の入荷量は前年、平年ともに1割程度下回った。 価格は不足感から高値で推移したが、旬を追うごとに下落傾向となった。月間では、前年を2割近く上回り、平年を2割以上上回った。

（執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹）

(4) 首都圏の需要を中心とした7月の見通し

夏野菜の生育は順調で、平年並みの進捗状況であり、直近2～3年のような高温による前進はない。東北・北海道の果菜類の出荷開始は前年より遅く、この春の雪解けが例年より一週間遅かったことも影響した。それでも、7月の産地の切り替え時期に出荷が少なくなるといった状況は、今のところないと予想される。一方で、^{ほじょう}圃場の生育状況は昨年と真逆で、全国的に5月までの夜温が低く、極端に暑くなる日があっても積算温度が足りず、全体的にやや小ぶりに仕上がっている。長雨ではなくても、適度またはそれ以上の降雨があり、土が乾く期間がないとの声があった。終盤を迎える加温物は、豊作傾向との報告もある。一方で、6月初めまで快晴の日が続かなかった場合には、7月に入って想定より荷が集まらないといった状況も予想され、特に6・7月に急激な気温の上昇があれば、樹木や果実がダメージを受け、7月に入り市場で複数品目の不足が発生すれば、市場価格は中央市場に引っ張られ、平年より高めに推移することも考えられる。

根菜類



だいこんは、北海道産（道南）は前年より5日程度遅い7月3日頃から出荷開始の見込みである。作付けは前年並みで、生育は順調である。北海道産（道東）は、例年よりやや遅い7月21日から共選出荷開始の見込みである。作付けはほぼ前年並みで、出荷が始まると10月初めまで一定ペースで続くと予想される。青森産は、出荷のピークが6月中・下旬で、6月末頃から減少し、7月には6月の半量程度となり、その後10月まで継続する見込みである。

にんじんは、青森産は例年並みの6月20日前後からの出荷開始となり、ピークは7月上旬で、7月末頃には切り上がると予想され、一部残量が8月の極めて早い段階まで出荷されると見込まれる。作付けは前年並みで、品種はトンネル物が「彩^{あやほまれ}誉セブン」露地物が「紅^{べによし}吉」。サイズはL中心である。前年は猛暑ではあったが、

平年作となった。北海道産（道南）はほぼ例年通りの6月20日前後から出荷開始する。播^{はしゅ}種は例年通り行われたが、3～4月の天候不順で遅れている。ピークは7月初め頃で、販売は7月いっぱいと言^いと予想される。品種は「紅みのり」である。サイズはL中心と予想される。

千葉産（香取郡）の夏にんじんは、出荷開始が遅れて6月10日頃に出そろ^いう見込みである。6月初旬時点で生育は順調であり、Lサイズ中心であるが、ピーク時からMサイズが中心になると見込まれる。7月20日過ぎまでの出荷はあるものの、量的に多いのは7月前半までとみられる。作柄としては、播種時期の天候不順から欠株があるなど、特に良好というわけではない。千葉産（船橋市周辺）の生育は遅れており、5月末時点でまだピークに至^{いた}っておらず、6月中旬にピークが来ると見込まれる。



葉茎菜類

キャベツは、群馬産は前年よりやや遅い6月5日頃から出荷開始したものの、量的には少ない。6月20日頃から本格的に増えて、7月は平年並みに出荷されると見込まれる。大きさは8玉が中心である。初期に凍^{とうそうがい}霜害がなく、適度の降雨もあり生育は順調である。岩手産は、早い生産者で6月20日前後から出荷が始まるが、前年が16日から始まっていたため、やや遅れている。生育そのものは順調で、ピークは7月20日頃からである。作付けは、ほぼ前年並みである。長野産は、6月20日から始まるが、生育は順調で7月中旬にピークとなる見込みである。8月に入るとピーク時の半分程度となり、再び増加するのは9月下旬に入ってからと予想される。

はくさいは、長野産は本格的に出そろ^いい、6月に入りピークとなっている。6月後半には減少しピーク時の半量以下になるも、7～8月の出荷が続く、9月に入り徐々に増えていくと見込まれる。ほぼ平年並みの出荷であるが、玉肥大は順調で、平箱が多いと見込まれる。

ほうれんそうは、群馬産の雨よけ物は6月

10日過ぎから出荷開始し、ピークは7月に入ってからと見込まれる。播種作業は順調で、盆過ぎ頃までは通常通りの出荷ができると予想される。量としては平年並みである。栃木産は雪解けが遅れて、作付けは遅れた。出回りも3～7日の遅れになり、出そろうのは6月10日過ぎからで、ピークは6月中旬から7月中旬までと見込まれる。8月に入ると、暑さの影響で出荷は減少してくると予想される。作付けは前年並みで、6月初旬時点で生育は順調である。

ねぎは、千葉産の夏ねぎの生育は順調で、現状は平年並みの出荷となっている。7月後半には減少に転ずるも、7月いっぱいまで多く、8月上旬に終盤となる見込みである。今年は太さも十分で、前年をやや上回る出荷が予想される。現状は、年末年始のねぎの定植も順調である。茨城産の夏ねぎは生育順調で、前年を上回る出荷となっている。今年の天気がねぎに適していたため、半分以上が2Lサイズと肥大良好である。7月中旬まで潤沢なペースが続き、その後は減少し、盆の前後が最も少なくなると見込まれる。

レタスは、長野産は例年通りの出荷となっており、当面のピークは6月15日から7月いっぱい、量的には前年並みと予想される。群馬産は順調な出荷が続いており、7月に向けて現状と同程度の安定した数量を維持できると見込まれる。盆明けから数量は減少してくると予想される。

果菜類



きゅうりは、福島産はハウスの半促成物で7月に入りピークを迎える。8月に入り減少し、9月に増加し11月までと予想される。雨よけ物は、6月10日過ぎから始まり、7～8月がピークとなり、10月いっぱいまで出荷が継続すると見込まれる。露地物は6月末から始まり、7月中旬から8月上旬にピークとなり、9月いっぱいまでの出荷が予想される。群馬産は、低温と日照不足はあるものの生育は順調で、特別減ることはなく6月10～20日の間に切り上

がると見込まれる。埼玉産は入梅が気になるところであるが、現状はやや少なめで、加温物の生産者は6月中旬には出荷を止めてくると予想される。無加温物は7月中旬までで、下旬からは一時的に休みに入る。7月は、猛暑で減少した前年を上回ると見込まれる。

なすは、栃木産の主力である露地物は、気温が低く一週間程度遅れ、現状は少なめの出荷となっている。ピークも後ろにずれて、7月25日頃と予想される。群馬産のハウス物は、例年よりやや少ないものの、順調に出荷されている。露地物も順調で6月中旬から開始し、例年並みのペースである。ピークは7月中旬から盆前までと予想される。福岡産は6月に入り、生産者の半数が出荷を止めて、7月は10日頃までとなる見込みである。今までのところ、この作については豊作であった。6・7月も、猛暑で少なかった前年を上回ると見込まれる。寒暖差があったことが、豊作になった理由と考えられる。

トマトは、北海道産（道央）は例年より7日程度遅れの5月4日から出荷開始となった。関東へは5月20日から始まり、出荷のピークは例年より後ろにずれて、7月末頃から8月の盆前になると予想される。天候は徐々に良くなっているものの、夜温が低いため着色が遅れている。品種は「桃太郎ブライト」で、当面はLサイズ中心だが、ピーク時にはMサイズ中心となると見込まれる。北海道産（道南）は4月13日から共選を開始し、促成作のピークは6月中旬から7月上旬までとなり、抑制作は盆明けから始まり、9月中旬がピークとなる見込みである。品種は前年までの「桃太郎ネクスト」から「桃太郎ブライト」「桃太郎みなみ」「麗月」「レオン」に変更した。作付けは前年比で微減である。青森産（県南）は早い生産者で5月20日から出荷が始まったが、例年より5日遅い。6月中旬には出荷のピークを迎える見込みである。ここ2～3年は気温高から出荷量が減少したが、今年の出方は平年並みと予想される。作付けは若干減少している。品種は「りんか」「麗月」である。青森産（県北）は、6月20日過ぎから始まるが平年並みで、ピークは7月後半から8月初め頃と予想される。作付けは今年も

減少しているが、着果は今のところ順調である。

ピーマンは、岩手産の出荷は開始しているが、4～5月の低温の影響により例年の70%程度と少ない。平年に追いつくのは6月20日前後になると予想される。露地物は、やや遅れはあるが6月下旬から開始し、その後本格的に増加してくると予想される。害虫の発生や強風もあったが、樹のバランスは良好である。最大のピークは8月上中旬となろう。茨城産の春ピーマンは6月中旬まで多く出荷され、その後7月10日過ぎに終了すると予想される。温室物は、徐々に生産者が減っているが、こちらも同様のペースで7月14日頃に切り上がると予想される。秋の抑制物は、8月に入ってから出荷を開始すると見込まれるが、少なかった前年を上回るものの、平年並みと予想される。福島産の露地物は、出荷開始は7月10日過ぎで、6月初旬時点では定植したばかりである。

土物類



ばれいしょは、北海道産（道央）の「きたあかり」は、春先の低温と4月の降雨が多かったため植え付けが7日～2週間遅れ、出荷開始は例年より7日程度遅れて、7月下旬からと予想される。5月の天候は、雨は適度であったものの全般に低温傾向であった。北海道産（道南）の「いまがね今金男しゃく」は、播種作業が10日から2週間の遅れとなった。前年は7月の終わりに出荷を開始したが、今年は8月に入ってからになると予想される。長崎産は、早い物が遅れて心配したが、本年産については豊作基調である。いもの仕上がりは大玉傾向で、品質も良好である。6月いっぱい潤沢に出荷できると予想される。作付面積は以前よりも減少しており、7月の出荷はほぼないと見込まれる。

たまねぎは、兵庫産は早生^{わせい}の最終盤となっているが、平年比ではやや少なめの状況にある。6～7月は中生^{なかくて}から晩生^{おくて}となるが、適度の雨があり平年並みのLサイズが中心となる見込みである。6月は収穫に注力するため出荷量が減少するものの、7月にピークを迎えると予想され

る。佐賀産は、生育の遅れと小玉傾向であったことが影響し、現在までの出荷実績は前年の70%と少なくなっている。今後回復が見込まれるが、出荷量は前年を下回ると予想される。6月に入り中生の収穫と選果に入っているが、6月に続き7月の出荷も同程度かやや少なく、8月には減少してきて終盤に向かうと見込まれる。サイズはLが中心である。



その他

ブロッコリーは、青森産はハウス物が始まっており、露地物は6月3日頃から出荷を開始した。定植が例年より2週間程遅れ、出荷のピークは6月20日過ぎからとなる。定植の遅れから7月10日前後まで出荷がある見込みである。コメ価格の高騰を受け、稲作に戻す生産者があり、作付けは前年に比べて80%と減少した。北海道産の出荷開始は、例年通り6月に入ってからとなる。早すぎた前年と比べると、やや遅い始まりである。作付けは前年並みで、ピークは6月末頃から7月の第一週までだが、その後10月まで出荷が続くと予想される。

かぼちゃは、神奈川産は、横須賀から始まって、三浦は6月中旬からの平年並みで、出荷のピークは6月下旬から7月上旬と見込まれる。栃木産は、前年は7月初めからの出荷であったが、トンネル物から露地物となるため、ほぼ前年と同様の展開が予想される。現状の生育は順調で、品種は「ET」と「ほっこり」である。

かぶは、青森産は気温が低めであるため7日程度遅れ、出荷開始は早くも6月20日前後からと予想される。6～7月にピークはないものの、平準的に出荷されると見込まれる。作付けはほぼ前年並みである。

スイートコーンは、北海道産は例年通りの7月25日以降の出荷と予想され、それ以降2週間がピークとなる。作付けは100～110ヘクタールと、例年と同程度の見込みである。今年はゴールデンウィーク頃の天気が悪く、また、過去2年よりも気温が低い。千葉産は、6月初

旬時点で遅れており、7月15日以降から出荷開始し、25日頃にピークとなると予想される。8月に入り徐々に減少し、盆前に切り上がると見込まれる。作付けは前年並みである。

えだまめは、千葉産はハウス物からトンネル物も出荷を開始してきた。霜の被害もなく、生育は順調である。7月に入ってピークとなり、特に海の日(21日)前頃に多くなると見込まれ、ほぼ7月いっぱいまで切り上がる。山形産の「だだちゃ豆」は低温気味でやや遅れ、7月末か8月初め頃から出荷開始し、盆前がピークと見込まれる。作付けは種が悪かったため、前年の90%と減少した。

さやいんげんは、福島産の「ジャンボ」は、前年より5日程度遅れて7月初めから出荷を開始し、15日頃がピークとなり、8月にはかなり減少し、9月に入り再び増加すると見込まれる。作付けは微減である。

にがうりは、長崎産は6月に入り増えてきて、6月中旬にピークを迎え8月10日頃までの出荷が予想され、前年よりやや遅いペースである。群馬産は、6月15日頃からハウス物は問題なく開始するが、露地物は半月程遅れている。7月に高温になれば、急増する展開も予想されるが、現状では樹はまだ小さめで、露地物にとっては、寒暖差は良くない。

メロン(貴味メロン)は、千葉産は、前年より若干遅い6月初めからの出荷となったものの、平年並みである。ピークは6月20日頃から7月いっぱい、8月の初め頃に切り上がると見込まれる。現状の玉肥大は、例年よりやや鈍いとみている。作付けは前年と比べ微減である。

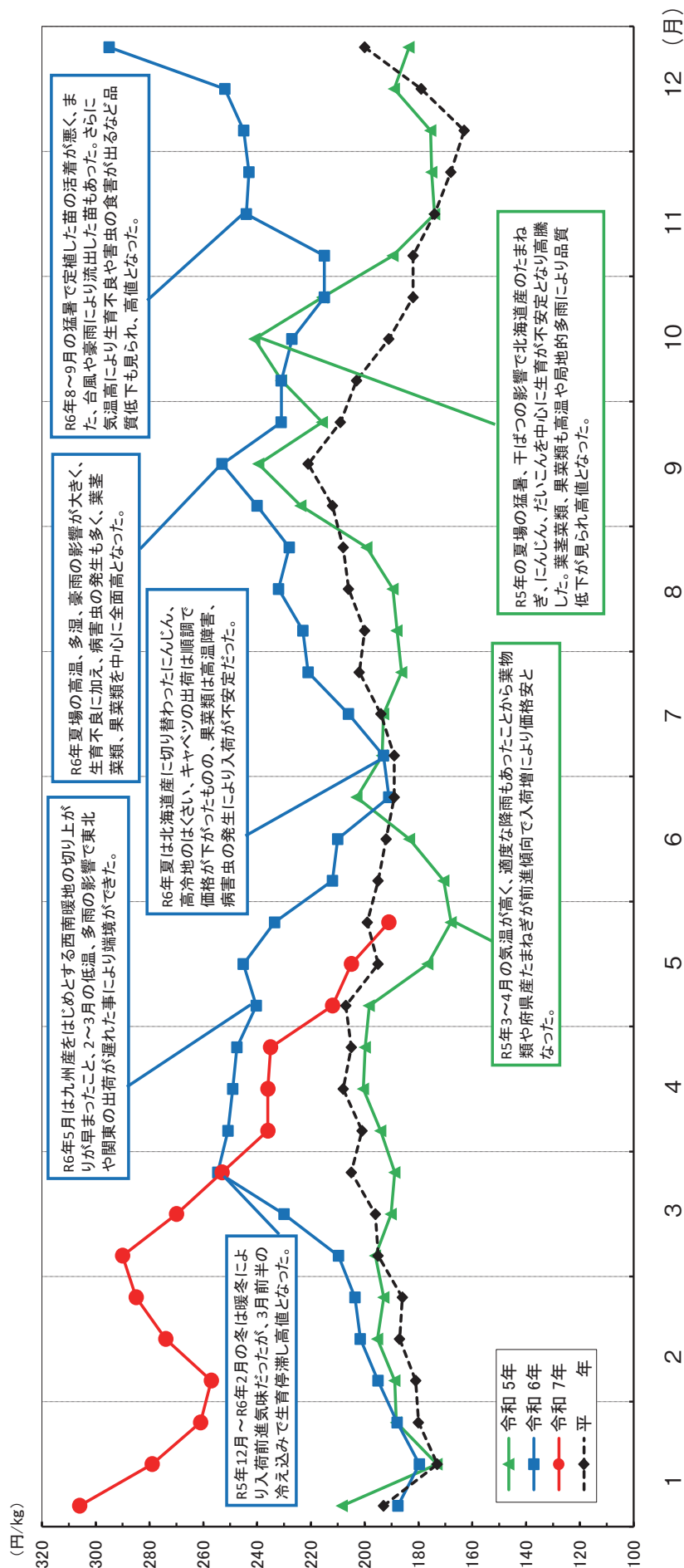
すいかは、山形産は7月15日頃から始まり7月下旬にピークとなり、8月に入って減少が見込まれる。7月に全体の7割が出荷される。交配が始まってから低温傾向で苦戦しており、前年の出荷開始は7月10日であったため、今年は5日程度遅れている。神奈川産の小玉は、6月中旬から下旬にかけて開始し、ピークは7

月初め頃となる見込みである。中心品種は「姫甘泉^{ひめかんぜん}」である。大玉は6月下旬から始まり、7月中旬にピークと予想される。6月初旬時点で交配時期に入っているが、天候が悪くやや遅れる可能性も見込まれる。長野産は例年と同様、7月5日から開始し、7月は徐々に増加し、8月の盆前後がピークとなると予想される。品種は「まつりばやし」系で、3Lサイズを中心の出荷と見込まれる。

(執筆者：千葉県立農業大学校

講師 加藤 宏一)

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位: 日/km)

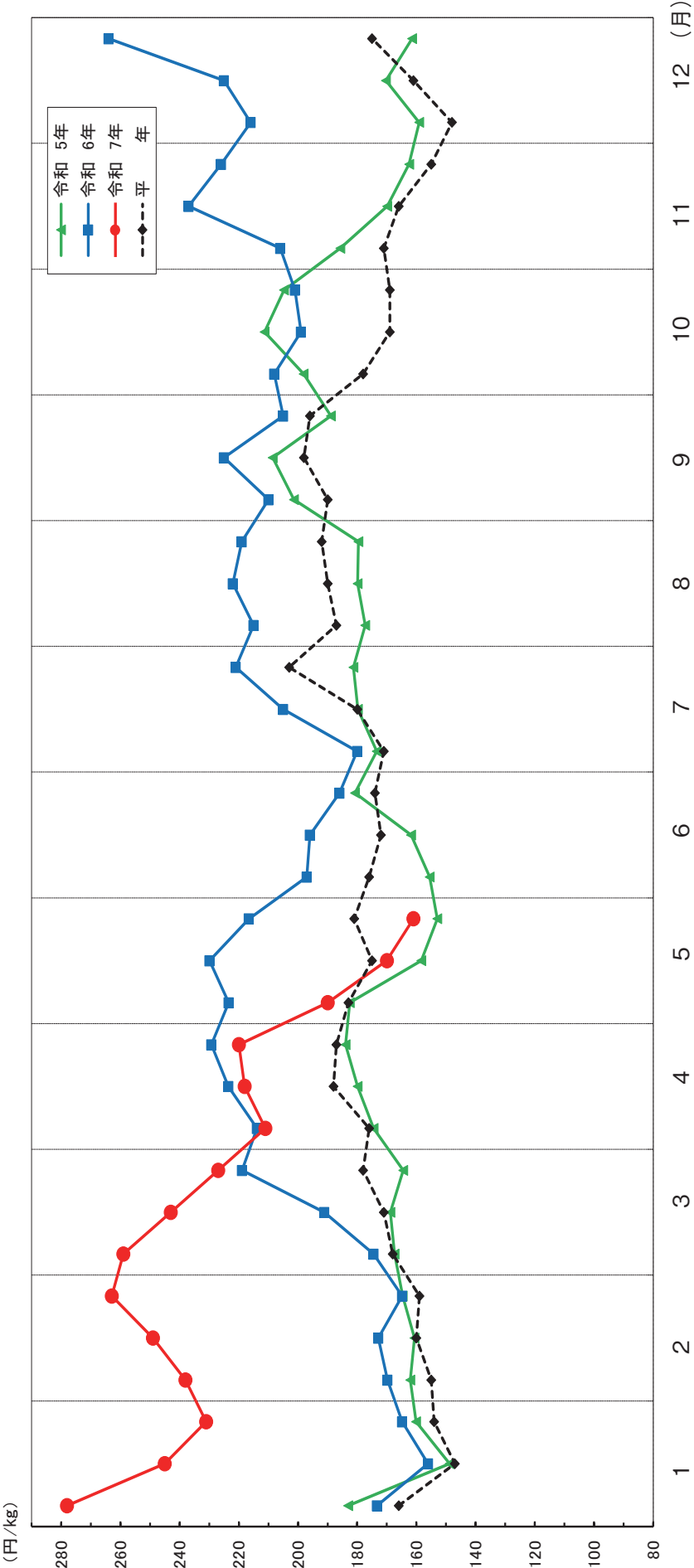
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬										
令和5年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194	193	186	188	189	199	224	239	216	231	241	216	190	174	175	189	184	
令和6年	188	180	188	195	202	204	210	230	255	251	249	247	240	245	233	212	210	191	193	206	221	223	232	228	240	253	231	231	227	215	215	244	243	245	252	295
令和7年	306	279	261	257	274	285	290	270	253	236	236	235	212	205	191																					
平 年	193	173	180	181	187	186	195	196	205	201	208	205	207	195	199	195	192	189	189	194	202	200	206	208	212	221	209	203	191	182	182	174	168	163	179	200

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（令和2年～6年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180	180
令和6年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	223	230	217	197	196	186	180	205	221	215	222	219	210
令和7年	278	245	231	238	249	263	259	243	227	211	218	220	190	170	161										
平 年	166	147	154	155	160	159	168	171	178	176	188	187	183	175	181	176	172	174	171	180	203	187	190	192	190

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注1：平年とは、過去5カ年（令和2年～6年）の旬別価格の平均値である。
注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。